

# 令和8年度病害虫発生予察情報 発生予報第2号(4月)

令和8年4月30日

発表：福島県病害虫防除所

## 【注意が必要な病害虫】

果樹	果樹共通：カメムシ類 - ③
----	----------------

- ※ 上記の表に記載された病害虫は、下記の①～③に該当します。  
注) ①現状において、注意報レベルの防除を要すると判断された病害虫  
②「1 主な病害虫の発生予報」のうち、予察調査の結果、発生時期が「やや早い」、発生量が「やや多い」と予測された病害虫の中で特に懸念される病害虫  
③「1 主な病害虫の発生予報」以外で調査の結果、今後、県全域的に発生が多く問題になると判断した病害虫



病害虫防除所  
HPは  
←こちらから



病害虫に関する  
防除対策の  
ページは  
←こちらから

## 1 主な病害虫の発生予報

### (1) 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水稲 (育苗期)	苗立枯病 (ピシウム属菌、フザリウム属菌等による立枯病)	全域	-	平年並	天候予報(仙台管区气象台4月23日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されている(±)。	急激な温度変化や、過湿・乾燥の繰り返しは発生を助長するため、適切な温度管理を行う。 育苗期間中の気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスの温度に注意し開閉等を行う。
	もみ枯細菌病	全域	-	やや多	種子更新率は平年並である(±)。 天候予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されている(+)	育苗期間中は28℃以下の温度管理を徹底する。 育苗器内の温度は、付属センサーだけではなく温度計を併用し、育苗ムラに注意する。
	苗立枯細菌病	全域	-	やや多		育苗期間中の気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスの温度に注意し開閉等を行う。
	ばか苗病	全域	-	平年並	種子更新率は平年並である(±)。	移植前の罹病苗は抜き取り、焼却または土中に埋没処分する。

水 稲 (育苗期)	イネミズ ゾウムシ	全 域	やや 早い	平年並	天候予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、このことを踏まえた、有効積算温度によるシミュレーションの結果、水田侵入盛期はやや早いと予想される(+)。	水田侵入盛期が移植時期と重なる場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。
	イネドロ オイムシ	全 域	早い	平年並	天候予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、このことを踏まえた、有効積算温度によるシミュレーションの結果、水田侵入盛期は4日～8日早いと予想される(+)。	幼虫期に低温が続く場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。 チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認されているため、効力低下が認められる場合には、薬剤を変更する。
麦 類	赤かび病	全 域	やや 早い	平年並	県農業総合センター麦類作柄解析試験(4月1日現在)の葉齢はやや進んでおり、天候予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されている(+)。 天候予報によると、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている(±)。	開花始めに防除を実施する。出穂後に降雨がある場合でも短い晴れ間を利用するなどして、確実に防除を実施する。薬剤等については、令和8年4月7日付け防除対策を参照する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

## (2) 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	リンゴ ハダニ	全 域	—	やや少ない	令和7年12月実施の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は平年より少なかった(-)。	ハダニ類の発生状況を観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。
モモ	せん孔 細菌病	県 北	—	やや少ない	4月中旬の県北地方の巡回調査(品種「あかつき」)において春型枝病斑の発生は確認されなかった(-)。	春型枝病斑は見つけしだい、せん除して適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する(令和8年4月30日付令和8年度病害虫防除情報参照)。

	モモハモ グリガ (第1世 代幼虫)	県北	—	やや少ない	令和7年12月実施の越冬量 調査において、越冬成虫は確認 されず、発生地点割合は平年よ り少なかった(—)。	第1世代幼虫発生期(落花 10日後)に防除を実施し、初 期の発生密度を抑えたいうえ で、複合交信かく乱剤を設置 する。
	ハマキム シ類(越 冬世代)	県北	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫によ る花らい被害は確認されず、発 生ほ場割合は、平年並であった (±)。	複合交信かく乱剤を使用す る園地では越冬世代成虫発生 初期までに設置する。
ナシ	黒星病	全域	—	平年並	4月中旬の芽基部病斑の発生 ほ場割合は平年並であった (±)。	鱗片が付着したままの花そ うは、芽基部病斑の目安とな るので、見つけしだい除去し、 園外に持ち出すなど適切に処 理する。 薬剤散布は降雨前の実施を 心がけ、散布間隔があきすぎ ないように注意する。
	ハマキム シ類(越 冬世代)	全域	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫によ る花そう被害は確認されず、発 生ほ場割合は、平年並であった。	前年発生が多かった園地 や、現在新梢への被害が見ら れる園地は、落花直後の防除 を徹底する。 複合交信かく乱剤を使用す る園地では越冬世代成虫発生 初期までに設置する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(—)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

## 2 発生が懸念される病害虫

水稲	<p>■ <b>紋枯病</b></p> <p>昨年度発生が多かったほ場では、代かき時に感染源となる浮遊残渣を除去する等の対策を行いましょう。</p>
リンゴ	<p>■ <b>黒星病</b></p> <p>本病の最重点防除時期は、展葉期から落花20日後頃ですので、この期間の薬剤散布間隔があきすぎないように注意し、散布ムラのないよう十分な量を散布しましょう。</p> <p><b>青森県をはじめ他のリンゴ主産県で本病の重要防除剤であるDMI剤の耐性菌の存在が確認されています。</b>本剤耐性菌がまん延すると防除薬剤の効果が低減するおそれがあるので、DMI剤の使用回数に留意しましょう。また、他県からリンゴ苗木・穂木等を導入する際は十分注意しましょう。</p> <p>病害虫防除所HP「注意喚起 他県でのリンゴ黒星病におけるDMI剤耐性菌の発生について」  <a href="http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/apple-dmi.html">http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/apple-dmi.html</a></p> <p>■ <b>褐斑病</b></p> <p>昨年10月の新梢葉における本病の発生ほ場割合は平年並でした。本病原菌は主に罹病落葉で越冬し、翌年4～6月に子のう胞子を飛散します。</p> <p>果樹研究所(福島市)では4月24日に子のう胞子の初飛散が確認されており、今後は降雨に伴い飛散します。例年発生がみられるほ場では、「農作物病害虫防除指針」や各地域のリンゴ防除暦を参照し、落花直後、落花2週間後、落花30日後に本病に効果のある薬剤を散布して初期の感染を抑えましょう。</p>

モモ	<p><b>■シロカイガラムシ類</b></p> <p>昨年の郡山市での調査において、歩行幼虫の発生時期の早期化が確認されています。</p> <p>ウメシロカイガラムシ第1世代のふ化開始は、今後の気温が2℃高く推移した場合は5月1半旬頃と予測され、防除適期は5月2半旬頃と推定されています(果樹研究所 令和8年4月28日現在)。</p> <p>シロカイガラムシ類はふ化定着初期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除を徹底しましょう。</p>
果樹 共通	<p><b>■果樹カメムシ類</b></p> <p>4月4半旬時点で、フェロモントラップへ誘殺されている地域が確認されています。特に山沿いの園地では、カメムシ類の飛来状況をよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行いましょう。</p>